

『Sports Graphic Number』におけるスポーツ報道の特徴の分析  
Analysis of the Characteristics of Sports Coverage on *Sports Graphic Number*

1 K08A175-1 濱田 愛

指導教員 主査 武藤泰明先生

副査 リー・トンプソン先生

【目的】

2011 年 9 月に発行された朝日新聞出版『Journalism』に、石井昌幸のスポーツ報道についての論文が掲載されている。その中で石井は「今の日本のスポーツ報道の多くに、その選手・監督の『内面』や『人間としてのアスリート』に焦点をあてドラマ風に仕立てたものが多くみられるが、本来スポーツ報道とは選手のパフォーマンスについてのみ批評すべきである。スポーツそれ自体を語る言葉よりも物語的表现のほうが多いことはそれを読者が望んでいるからというより、日本においてスポーツを言語化する努力の積み重ねがいまだ浅いことを示しているのではないか」と論じている。また森田浩之は、石井とは対照的にその著書『メディアスポーツ解体―〈見えない権力をあぶり出す〉』において「アイデンティティを形成するという面から、スポーツ報道は物語報道がのぞましい」と論じている。

スポーツ選手の内面や人間性に焦点をあてて記事が構成されている、日本の主たる雑誌が『Sports Graphic Number』（以下、『Number』とする）であるが、この雑誌が取り上げている内容の傾向をバックナンバーから分析し、石井と森田の相反する論文を検証する。さらに、Number 創刊号に掲載された「江夏の 21 球」を読み解き、Number とは一体どのようなスタイルのスポーツ報道をしているのか、また、今後の Number におけるスポーツ報道の変遷を考察することが本研究の目的である。

【方法】

第一章では先行研究として石井・森田の両論文を読み、分析した。

第二章では雑誌『Sports Graphic Number』の 2005 年 1 月初号から 2011 年 11 月末号までの計 168 冊の「目次」に登場する、記事で取り上げられている「人(選手・監督・指導者・解説者・その他関係者)」、「チーム、競技等」について、データを取った。その後、全体を通じて取り上げられている「人」と「チーム等」の比較、「箱根駅伝」と「高校野球」から見る Number の掲載記事の変遷、サッカーに

関連する記事の変遷、また特にインサイドストーリーに関する記事の変遷について、さまざまな点から分析を行った。

山際淳司『スローカーブをもう一球』(角川書店、1985 年)に掲載されている「江夏の 21 球」は Number 創刊号(1980 年)に掲載され、読者の反響が大きく、映像化もされたノンフィクションである。これが今の Number のスタイルを形成しているといってもよい。第三章では「江夏の 21 球」を読み解き、Number がどのような雑誌であるか分析し今後どのようなスタイルになってゆくのかを推測した。

第四章ではまとめとして、行った分析のおさらいとそこからわかったことを述べた。

【結果】

先行文献では石井と森田の論文を分析し次の 3 項目が強く見えた。①国内におけるスポーツ報道は「物語」で脆弱化している②そもそもスポーツ報道は「物語」なのがよい③物語的なスポーツ報道は読み手が望む望まざるに関わらず、メディアによって操作される／しかしテレビや新聞と違って Number は、ほとんどの読者が能動的に購入することから、Number がどのような記事に掲載してきて、それは読者のニーズを反映しているか分析した。

人とチーム等の対比では人を取り上げる記事が圧倒的に多いこと、ドラマ性を持った箱根駅伝と甲子園は毎年の掲載記事として定着しているとは言い切れないこと、また全体を通じてインサイドストーリーの掲載が近年増加傾向にあることが分かった。

【考察】

Number はインサイドストーリーの物語的な記事がその中核にあり、それはこれからもおそらく変わらない、もしくはますます増加していくだろう。しかし、この記事は物語的なだけではなく、分析的な面も持ち合わせている。それは「江夏の 21 球」から読みとらえることができるし、高校野球の特集記事のタイトルからも見て取れる。隔週誌として流動的ではあるがこの部分は創刊号から変わらないものであるといえる。